

令和 5 年 5 月 25 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K01045

研究課題名（和文）元代中後期の両浙地域における新興商人の実像と社会経済の動態に関する研究

研究課題名（英文）A study on the emerging merchants and socio-economic dynamics in the Liangzhe regions in the middle and late Yuan Dynasty

研究代表者

矢澤 知行 (Yazawa, Tomoyuki)

近畿大学・国際学部・教授

研究者番号：60304664

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、元代の中～後期の両浙地域における諸産業のうち、綿業と海運に着目して分析することにより、モンゴル政権下の江南社会経済の動態について考察を行った。綿業については、長江デルタ地域における展開をさまざまな角度から検討した。一方、海運については、それを担った船戸や新興商人を含む地域エリートの具体像を探るとともに、海運運営体制の展開過程を5つの時期に区分し、それぞれの特徴を示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

モンゴル元代の海運についてその歴史的評価を示すことができた。中国史の枠組みのもとでは、南北中国を経済的に一体化させる新たな選択肢であると同時に、内陸水運や塩政ともリンクしつつ財政を支える物流ネットワークの主要幹線としての側面を持っていた。視野をユーラシア規模に拡大してみると、モンゴルの海洋政策のもとで南海貿易と接続していた江南地域を、さらに北方の大都へと接続する役割を果たしたと評価できる。この海運事業において重要な役割を果たしたのが、元代中後期の両浙地域における新興の船戸や商人であった。

研究成果の概要（英文）：In this research, I reviewed the socio-economic dynamics of Jiangnan江南 under the Mongol regime by focusing on the cotton industry and the maritime transport in Liangzhe両浙regions during the middle to late Yuan元 Dynasty. As for the cotton industry, the development of the Yangtze River長江 Delta region was examined from various angles. On the other hand, with regard to maritime transport, I explored the specifics of regional elites, including shipping agent船戸 who was in charge of shipping and emerging merchants, we were able to divide the development process of the shipping management system into five periods, and were able to show the characteristics of each.

研究分野：モンゴル元代史

キーワード：モンゴル 元代 江南 社会経済 海運 綿業

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 元代の社会経済史研究の分野においては、これまで戸口、税役、通貨、駅伝、商業、貿易など諸領域の成果が積み上げられてきた。しかし、宋代から元代を経て明清時代にいたる時代縦断的な把握が試みられるなかで、宋代と明清代に関わる研究が着実に進展してきたのに対し、モンゴル元代の社会経済史研究が遅れをとってきた感否めない。とくに、元代の中後期については、交鈔の濫発による経済の混乱や帝室歳費の膨張など放漫な財政状況が強調される一方で、両浙地域を中心とする産業の多様化とそれに伴う新興商人ら地域エリートの成長といった事実は看過されてきた。

(2) 一方、元代中国の社会経済をユーラシア規模の地域横断的な観点に立って考察する必要性もある。杉山正明やルゴド J.L.Abu-Lughod が 13~14 世紀「世界史」のグランドデザインを描き、それに呼応するようにモンゴル・中国・朝鮮・チベット・イラン・ロシア等の各地域史の研究者が細部を実証的に構築する作業を進めつつある。しかし、元代の社会経済史研究はそうしたグランドデザインへとスムーズに接続できるのか、中国江南地域の社会経済はモンゴル政権の支配下でどのように位置づけられ、そこにどのような変化があったのか、といった問題については明確な結論が出ていない。

(3) これらの背景をふまえ、筆者は、本研究に着手する一つ前の段階として、元代江南における財務官僚群の動向を対象とする研究を行った。モンゴル元朝の江南に対する社会経済政策の変遷を辿るその研究の過程で明らかになってきたのは、財務官僚とその周辺に豪民や塩商ら在地農商諸勢力の存在が垣間見られること、そして元代中~後期の両浙地域においてこれらの勢力の伸張が看取されるという点であった。このことに着想を得て、江南在地の農商諸勢力のうち新興商人に焦点を当て、その実像や彼らを取りまく状況を探ることにより、元代江南の社会経済の動態を分析することができるのではないかと考えた。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究では、元代の中~後期の両浙地域における産業の多様化と当時の新興商人の具体像を探ることにより、モンゴル元朝統治下の江南における社会経済の動態を分析する。さらに、宋代や明清代の江南地域との連続性あるいは質的相違を明らかにし、この時代の持つユーラシア世界史上の意義を考察することを目的として開始した。

(2) 従来描かれてきた図式は、北方の大都首都圏に拠点を置くモンゴル元朝が、江南デルタ地域を経済的に支配下に置き、そこから収奪を行ったというものであった。しかし本研究では、江南地域の人びとを支配される客体としてだけではなく、競争する主体としても認識して研究を進めた。江南デルタの中でもとくに経済発展の進んでいた両浙地域に着目し、そこで実力を蓄え、存在感を強めていた新興商人らの実像を明らかにすることによって、モンゴル政権による江南支配の実相を捉えなおすことをめざした。

(3) また、本研究では、モンゴル政権ゆえの特殊性が江南地域にどれほど及んだのか、宋元明代を通じて一貫して江南地域に受け継がれたものは何か、といった問題についても考察を試みた。この研究目的は、先述のように、元代の江南地域研究が宋代や明清代のはざまにあるミッシングリンク *missing link* のような位置付けにあることと関連している。

(4) さらに、元代江南地域の社会経済が、13~14 世紀モンゴル時代におけるユーラシア規模の経済活動とどのように結びついてきたのかという問題の解明もめざした。オルトク(幹脱)と称されるウイグル・ムスリム系の特権商人が広範囲に活動したモンゴル時代において、当時の中国江南の社会経済はユーラシア世界全体とどのように接続していたのか。また、そこにどのような変化があったのか、といった問題がその具体的な内容である。

## 3. 研究の方法

(1) まず、元代中後期の両浙地域における産業の多様化の実態を再検討するため、先行研究をふまえつつ論点を探ることから着手した。これと並行して、農業と塩業、絹織物や綿織物等の工業、北方に向けての海運業、高麗・日本・琉球などとの海上貿易などについて、現時点での研究の到達点を確認しつつ、その内容を整理する作業を行った。また、史料面においては、典籍・地方志・文集・碑刻・文学作品など多岐にわたる漢文史料を収集し、活用することを心がけた。具体的には、両浙地域の地方志を中心とした関連諸史料や、『元典章』所載の関連条項や鄭元祐『吳僑集』所載の海運関係の記事等など、元代の社会経済史に関する貴重な手がかりとなる記事を含みながら、今まで十分に顧みられず、検討の余地が多く残されている史料の講読を開始し、逐次それらの整理と解説を進めた。

(2) つづいて、産業の多様化に伴って成長した両浙地域の新興商人を含む地域エリートについて、その概要を把握する作業を行った。その活動拠点であった平江(現蘇州)とその周辺に着眼点を絞り、崑山の顧氏、周荘の沈氏、湖州・長興の費氏、平江・常熟の曹氏、激浦の楊氏などを研究対象の候補とした。そして、彼らに関する文集史料中の碑記・墓誌銘・行状・詩編や石刻史料、元曲・雜劇など関連諸史料の蒐集を始めた。研究開始当初は、両浙地域で発達した多様な産業の中でも、松江を中心とする綿花栽培と綿織物工業、崑山と太倉を中心とする海運業、慶元(寧

波)を中心とする海上貿易について具体的に解明することをめざした。しかし、COVID-19の影響もあり、史資料収集のための海外渡航が叶わず、また、国内出張も制限されたため、対象をやや狭めざるを得なかった。最終的には主として海運・漕運業にフォーカスを当てて研究を進めることにした。結果として、研究対象は、湖州・長興の費氏、平江・常熟の曹氏、澉浦の楊氏に絞られることとなった。

(3) これらの研究対象はいずれも海運にたずさわる船戸であり、同時に新興商人としての性格や、海運万戸などの海運官としての性格も持ち合わせている。彼ら相互の人間関係や群体としての特徴、モンゴル政権中枢との関係などを分析しながら研究を進めていった。商人を含む民間人は一般に史料上に現れにくい、彼らの多くは、文人としての側面を持っていたり、在地の地方官に任じられたり、北方から派遣された士大夫官僚と密接な関係を結んだりしているため、関連史料を抽出分析することによって、彼らの具体像をある程度明らかにすることができた。

(4) 以上の研究内容を総括したうえで、モンゴル元朝による江南経済支配の特質やユーラシア世界史上の意義、元代と宋代・明清代との連続性といった学術的課題の解明に臨んだ。

#### 4. 研究成果

(1) 本研究では、元代の中～後期の両浙地域における諸産業のうち、綿業と海運に着目して考察を行った。綿業については、長江デルタ地域における展開をさまざまな角度から検討した。一方、海運については、それを担った船戸や新興商人を含む地域エリートの具体像を探ることにより、モンゴル政権下の江南社会の動態について分析と考察を行った。

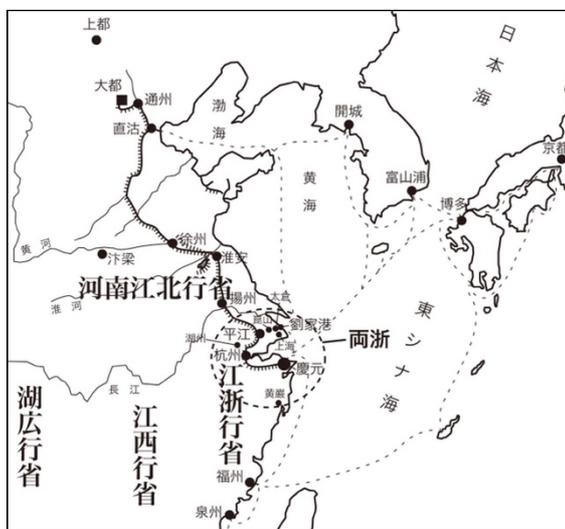
(2) まず、元代中後期の両浙地域において多様化した産業のうち、綿業に着目し、国内外の先行研究を整理して現時点での到達点を確認するとともに、長江デルタ地域における綿業の展開をさまざまな角度から検討し、研究上の課題を明確化した(「元代長江デルタ地域における綿業の展開とその意義」)。そこでは、綿の生産から消費にいたるまでの過程と具体的な状況、とりわけ元代の中後期に長江デルタ地域で成長してきた新興商人たちの実像を探ること、内的要因と外的要因という二つの側面を念頭に置きながら、長江デルタ地域内部の人間の活動によって生じる社会経済的環境の変化や、それらと自然環境との間の影響関係、モンゴル政権の対江南支配政策とその段階的变化といったさまざまな要素を考察することなどの必要性を指摘した。

(3) つづいて、多様化した産業のうち大運河と海運に着目し、それらが両浙を含む江南一帯に及ぼした影響について考察した(「元代の水運と海運 華北と江南はいかにして結びつけられたか」、「宋元の大運河と海運——中国の南北を結ぶ大運河・海運はどのような役割を果たし、どう変化したのか」)。大運河は、隋代に完成して以来、政治的に重要な華北と経済的に豊かな江南とを結びつける役割を果たしていた。一方、モンゴル元朝による南北統一後、外洋航行の海運も開始された(図1参照)。元代にはその両者が併用されたが、総じて前者から後者へと比重が移っていったとされる。ただ、両者の関係について、大運河の輸送量が伸び悩んだため窮余の策として海運に頼るようになったのか、あるいは海運が急速に発展したことによって大運河の相対的位置が低下していったのかをめぐっては見解が分かれることを指摘した。

(4) また、宋元代における大運河・海運の発展とその歴史的意義についても論じた。歴代中国統一王朝にとって、政治的に重要な地位を占める華北に向けて江南の余剰食糧を輸送することは、国家を一体的に運営していくうえで重要な課題であった。宋代までの大運河の発展はまさにその課題に対応したものと見える。しかし、北方から到来したモンゴル元朝は、遊牧世界と農耕世界の境に近い大都に拠点を構えたため、江南との距離が問題となった。元朝は海運という新たな選択肢を加えることによって上述の課題を克服したといえるが、これを異民族王朝による収奪として見るのか、遊牧・農耕世界から海洋世界までを視野に収めた壮大な事業として評価するのかなど様々な立場からのとらえ方がある。

(5) さらに、海運と東アジア海域交流圏の接続を探ることにより研究視野を広げられる可能性も指摘した。つまり、元代の海運を、長江河口以北への積極的な進出と南北の海域の接続という文脈上でとらえなおすことにより、新たな研究課題がいくつも浮上する。例えば、南海貿易に従事していた船が北上して直沽に至るケースはどれほどあったのか、大都への海運の任務を遂行した海商が朝鮮半島に赴いて交易するようなケースは一般的だったのか、それら海運や交易を担っていた海商とはどのような存在だったのかといった課題がそれにあたる。

(6) 大運河と海運をめぐる以上のような概観的考察に加え、元代の中～後期における江南在地の富民・豪民との関係についても論じた。国家として発展の著しかったクビライ期に比べ、元代の中～後期は、中央における政局の混乱もあって、低迷した時代と理解されがちである。だが、



【図1】元代の両浙地域と主要な漕運・貿易ルート

江南とくに長江デルタ地域にあつては、諸産業の発展を背景に富民・豪民といった在地の農商諸勢力が社会経済的な実力を蓄えていた時期と見ることができる。その中でも主要な位置を占めていたのが、海運事業や海上貿易で財を成した有力な船戸や海商たち、あるいは大運河沿線の揚州や蘇州などを拠点に活動して資産を形成した塩商たちであった。

(7) これら在地の諸勢力のうち、海運に関わった人びとを具体的に取り上げ、元代における海運の運営体制の展開過程を探る研究を行った（「元代における海運運営体制の展開」）。そこではいくつかの点を明らかにした。まず、元代の海運運営体制の展開過程を明らかにし、次の5つの時期区分を提示した。

- A 海運の開始から朱清・張瑄の失脚まで（1283-1303年）
- B 新興船戸の登場と海運運営体制の再構築（1304-19年頃）
- C 海運運営体制の完成・強化および財政部門化の進行（1319-35年頃）
- D 海運運営体制の動揺と改革（1335-51年頃）
- E 海運運営体制および江南支配の崩壊（1352-68年）

この5つの時期区分のうち、両浙地域において在地の船戸が新興勢力として登場してきたのは時期Bと考えられ、先述の費氏・曹氏・楊氏などがその新興船戸にあたる。彼らは単独で勢力を伸長させたというよりも、西方系財務官僚との協力関係を背景にその地位を築いていたことが窺える。その後、時期Cになると、海運の運営体制の組織化が進み、これらの船戸は、管理官のような立場にある海運万戸のもとで事業に専念するようになった点を考察の結果として示した。

(8) 以上のように展開してきたモンゴル元代の海運が、歴史的に見てどのように評価できるかという点についても考察した。結論として、モンゴル元朝にとって海運は国家財政を維持していくための生命線であったが、江南の人びとにとっては富を吸い上げられるストロー的な装置であり、社会矛盾を引き起こす要因にはかならなかった。また、中国史の枠組みのもとでは、南北中国を一体化させる新たな選択肢であると同時に、内陸水運や塩政ともリンクしつつ財政を支える物流ネットワークの主要幹線としての側面を持っていた。そして、視野をユーラシア規模に拡大してみると、モンゴルの海洋政策のもとで南海貿易と接続していた江南地域を、さらに北方の大都へと接続する役割を果たしたと評価できる。

(9) 一連の研究を通して得られた成果は以上である。しかし、次の諸点については課題が残された。まず、両浙地域における産業の多様化に関して、当初は、松江を中心とする綿花栽培と綿織物工業や、慶元（寧波）を中心とする海上貿易についても分析作業を進める計画であった。しかし、綿業については研究上の課題を示すにとどまり、海上貿易についても海運との接続の観点から若干の考察を行うことしかできなかった。本来、元代中～後期に勢力を伸長させた新興商人は多岐にわたると考えられる。それらの全体像を把握するためには、史料分析をさらに進める必要がある。

(10) もう一点、モンゴル元朝による江南支配の特質が時代とともに変質していった可能性についても、今後の課題として提示しておきたい。上述の通り、海運運営体制の展開過程については5つの時期に区分してそれぞれの特徴を示すことができた。元代中～後期に見られるこの時期区分とその展開を、そのまま元朝による江南支配の変質ととらえてよいのだろうか。現段階では論証の不十分な点が多く残されているため、今後の課題としたい。

(11) その他、元代中後期の政治動向、とりわけ江南支配政策の変遷との影響関係や、張士誠政権期の平江についての再検討、明清代との接続をめぐる問題などといった研究課題も残されている。これらの研究を着実に進めていくことによって、元代江南における社会経済の実相や、モンゴル元朝と江南地域社会との間に働いていた力学、モンゴル政権による江南経済支配の特質などの解明に近づくものと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 矢澤知行	4. 巻 256
2. 論文標題 元代の水運と海運 華北と江南はいかにして結びつけられたか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 2-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢澤知行	4. 巻 4
2. 論文標題 元代長江デルタ地域における綿業の展開とその意義	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of International Studies	6. 最初と最後の頁 77-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 矢澤知行	4. 巻 8
2. 論文標題 元代における海運運営体制の展開	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of International Studies	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 吉澤誠一郎他編、矢澤知行（分担執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 378
3. 書名 論点・東洋史学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------